

アメリカに留学して

Student's Life in America

沢村 千栄子

1973年から1975年までの2年間、私が勉強したインディアナ大学というのはアメリカ中部のとうもろこしとはっかの産地として又、インディレース開催地として知られる静かでのんびりしたインディアナ州のブルーミントンという町にあります。ニューヨークから西へ飛行機で1時間半、シカゴから南へ1時間弱の、ケンタッキーにも近い所に位置しています。2, 3時間車に乗っても山も海も見えず唯々平地ばかりが続き、地平線に夕陽が沈むのが眺められたり、牛や馬の群れに出会ったりするフォスターの数々の曲から容易に想像できるような典型的なアメリカの田舎です。現代アメリカというイメージからはほど遠く寧ろ、開拓時代を思わせるような地方です。ブルーミントンには何の産業もなく大学だけで成り立っていて、もし教授や学生達がいなくなると、ごく少い地元の人が残るのみという小さな町です。春には花々が咲き乱れ夏にはホテルで芝生が金色に輝き特に秋の紅葉は素晴らしく頭の中から足まで凍ってしまうのではないかと思う程の寒い寒い灰色の長い冬を除けば勉強したり人間らしく生活するには最高の環境です。



私が住んでいた学校のアパート

アメリカの大学やその学生生活といっても私の知るのは州立のインディアナ大学だけであって他の私立の大学とは異なる点もかなりあるかもしれませんが、ここに関してのみ書いていきたいと思います。まず学生が生活するための大学の設備ですが、寮は小さいながらも個室で各々のプライバシー

ーが尊重されるようになっていて勿論冷暖房完備で食事も3度用意されます。日本の大学と違って面白いのはこの独身用の寮とは別に学生夫婦のための学校のアパートがあり、それぞれ大きさも2DKとか3DKとか家族の構成数に合わせて選べるようになっています。結婚しても勉強を続けることは女性にとってさえ、全然珍しい状態ではなく、子供がいても保育所に預け、夫婦で助け合ってアルバイトをして生活費を捻出し、卒業まで頑張っているようです。その他にも民間のアパートや2、3人で1軒の家を借りて住んでいる学生も数多くいます。練習は全員学校で出来るようになっていて、あまり良いとはいえないスタインウェイのピアノが入っている練習室が朝の6時から夜中の2時まで開放されていて自分のペースに合わせて時間時間を選ぶことができます。時には全室が塞がっていることもありますが朝や夜にはいつでも練習できるだけの部屋数があります。土、日曜日でも休まず皆よく練習しますが1晩だけ金曜日の夜というのはアメリカ人にとっては週末に入る前夜ということで特別な意味を持っているらしく、パーティにデートにと思いきりリラックスして遊ぶので誰一人として学校にはいないという徹底ぶりです。小さい図書館は各学部には付属してありますが、それとは別に日本語の本を例にとっても文学全集から週刊誌にいたるまでそろっているような豊富な内容と量を誇る十階建の立派な総合図書館があり、中にはカフェテリアもあり、学生は終日利用することができます。

アメリカの大学は入学するのは比較的易しく、卒業するのが難しいとよくいわれますが、インディアナ大学に関する限り、全くその通りで入学はしたものの毎年多くの落伍者が出ます。(例えば1年生から2年生に進級できるのは入学時の人数の僅か60%の学生にすぎません)。

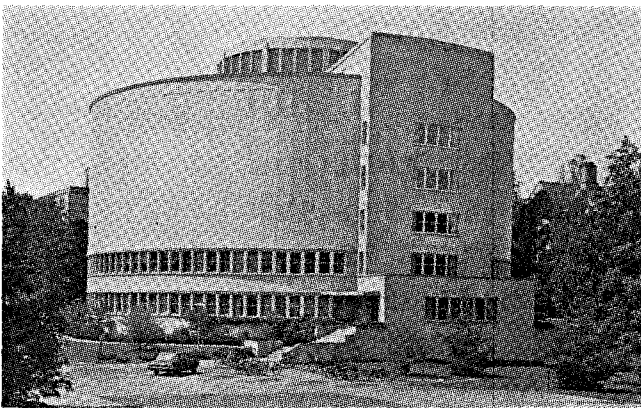
アメリカの学生は以前私が彼らに抱いていたイメージとは大違いで学生生活に関する限り驚くほど真面目で授業をさぼるようなこともなく、毎日毎日山ほどの宿題を出されても文句も言わず、実技以外の勉強もとてもよくします。学科の試験期になるとかなりその前から練習などとてもできないぐらい勉強しなくてはならず、暗記物などもバカ正直と思えるほどで1から10までせつせと詰め込む努力をします。(例えばハイドンの全作品の作曲された年代やその調性を丸暗記するといった具合)。

学校は大学、大学院、博士課程それに外国人やレッスンだけを受ける者のための特別コースなどから成立っていて、幅広い年代を様々な国籍の学生が勉強しています。最近のアメリカでは大学を卒業した程度ではとても職を見つけることはできない状態で、オーケストラに入った演奏だけで生活できる特別な学生を除いて大半が大学院にまで進み、その中でもピアノ、声楽、作曲専攻生はさらにドクターコースまで勉強を続ける希望を持っているようです。1年は9月から12月までと1月から5月までの2つの学期から成り、その1つの学期を単位としてカリキュラムが組まれています。

その間は国のどんな祝祭日も無視して授業は行なわれそのかわりまとめて途中、1週間程の休みが入ります。授業料も毎学期出る授業の単位数によって額が決るのでその都度払うようになっています。大学を卒業するには必ずしも、4年かかるわけではなく、1学期間に多くの

単位を取得すれば、3年又は3年半で終了することも可能です。それにどの分野においても世界の最先端を行こうとするアメリカであるはずなのに驚くほど封建的な面を持っていて、特に就職に関しては、日本で東大々と騒ぐ以上に学校差、成績を重視しそれらによって給料も異なるほどなので、学生時代から少しでも早く独立して、高いサラリーを得ることができる良い職場を求める彼らは真剣に勉強せざるをえないのです。

大学における一般教育科目とか専門科目のカリキュラムは大体日本と同じようなものです。が、実技に関してはずいぶん異なり、試験はなくリサイタルを2回することによって単位が与えられるようになっています。それにはまずリサイタルをするだけの資格があるかどうかのテストを受け、それにパスしてからリサイタルのための準備をします。その試験にパスしない限り、いつまでたっても卒業はできないのです。オーケストラは全部で5つあってそれぞれが毎月一度定期演奏会をするのでそのため、弦、管、打の学生は毎日2時間程の練習を義務づけられていて大変な重労働ですが、次々と多くの曲をマスターするのでオーケストラの入団試験にはとても役立っているようです。ピアノ専攻生は合唱か又は3人の生徒の伴奏をするかのどちらかをしなくてはならず、特に伴奏をすることはとてもよい勉強になり、毎時間多くの初見をこなし、ピアノ以外の先生からレッスンを受けられるということは貴重な体験になります。



学校 窓のあるのはレッスン室で、それより上の窓のない所は全部練習室。

声楽の学生にとっては語学の勉強が日本人の我々にとっては信じられないぐらい大変で、独、仏、伊の3ヶ国語を会話が出来る程度までマスターしなくてはなりません。社会に出てすぐ役立つようにと多くのカリキュラムが組まれていて、在学中2度のリサイタルで演奏経験もでき、その他度々オーケストラとの協演の

ためのオーディションがあり演奏のチャンスは多くあります。大学院でも1回のリサイタルは必要ですが、それよりも専門学科の勉強が大変で日本で大学を卒業したからといってアメリカに行ってもすぐ大学院の授業に出て、例え言葉ができたとしてもついてゆけるようなレベルではなく、従ってアメリカでマスターを取ということは並大抵のことではありません。ドクターコースには、就職口が見つからず仕方なく勉強を続けているという学生も含めて、かなりの人数がいますが何百枚という卒業論文を書き上げるということは、音楽学生にとっては容易な

仕事ではなく、マスターを終え博士課程に入ったものの、アメリカ人でも音楽でドクターの称号を与えられる人はほんの数えるほどしかいません。それにリサイタルの内容もソロを3回、コンツェルト1回、室内楽と、かなり厳しいものです。このようにアメリカ人にとっても、決して楽ではない大学生活の中へ、言葉のハンディを持った外国人が仲間入りするのには、かなりの覚悟をしなければならないし、必身共に相当丈夫でなければやってゆけません。一般の授業をアメリカ人と一緒に受けられるという留学生は余程の語学力を持った人に限られ、大部分の学生は実技のレッスンだけで精一杯といった有様です。そのレッスンですら、私の場合など最初の頃はイエスとノーしか答えられず、それも間違えていたかもしれないような状態でした。出発前には勿論ある程度の勉強はして行ったし、入学前には実技と一緒に試験まであったのに、数ヶ月はとても会話どころではありませんでした。最初の一学期間は毎日午前中は留学生のための英語のクラスでみっちりしごかれ、ピアノのレッスンより何倍が大変だったことを覚えています。このような言葉のハンディはあっても彼らの歴史とか国自体を考えると当然のことかもしれないが、多くのアメリカ人は、我々外国人を特別な目で見ることではなく、すぐに友達を何人か作ることはできます。しかし一見陽気で楽天的でフレンドリーなアメリカ人ですが、孤独で寂しがりなことも事実で、友達はたくさんいてもいわゆる日本人の考えるところの親友と呼べる友を持っている人は少いようです。あまりに、社会全体が合理化され、機械化されて人の力を借りなくても生きていけるようになると、却ってそれらの力に押しつぶされ、余程図太い神経を持を合せていない限り、どんどん孤独に陥り、自分以外の何物（者）をも信じられなくなり、悪くするとそれが精神病へとつながって、その点を今のアメリカ人は最も恐れているようです。アメリカで人のため、社会のために何かをしようとするのは、特別心が豊かで金銭のゆとりのある人か、逆にそれによって自己満足を得ようとしたり、世間に自己を主張したいという野心を持っている人種に限るのです。学校という小さい組織の中にあってもそれは同じことで、彼らはクラスにおいても演奏するに際しても、何とか自分を主張しようと努力し、又それができない学生はどんどん取り残され能力がないと見なされるわけです。ちよっとスランプに陥ったり悩んだりすることがあっても、それを友達に相談するようなことはなく、自分一人で唯々考え、どうしようもなくなるとカウンセラーや医者を訪ねたりします。

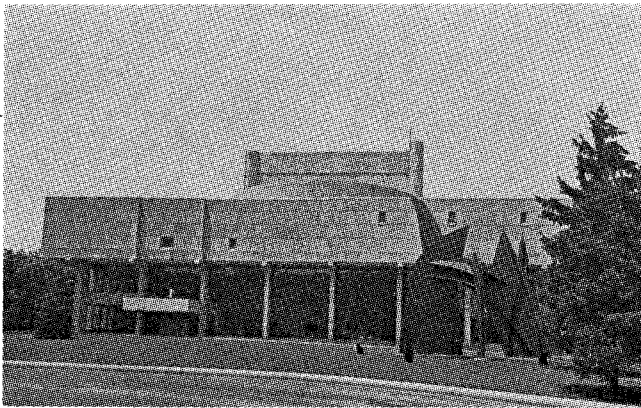
その点日本人は何でも話せる友達を各々何人かは持っているし、お酒を飲んでグチを言い慰めあって気晴しをすることもでき、とても幸せだと思います。

学生のリサイタルは毎晩といってよいほどたくさんあるのですが、彼らが演奏する時緊張したり上ったりするのは我々と同じなのですが感心させられることは、私など弾く前には何とか無事にミスしないで終りたいと唯それだけを願うのに彼らは何らかの形で個性を出そう、又聴く人にアピールする演奏をしようとします。

聴いている側でも演奏する側でも、少々失敗など全然気にはせず、それよりも面白い演奏を期待し、そういう演奏に対しては大きな拍手を送ります。(日本の大学の試験でも、もっとい

いろいろな演奏スタイルがあれば、審査する我々も疲れることなく楽しめるだろうにと思います。）

アメリカ人学生の勉強している面や、ゆがんだ精神状態などを書いてきましたが、ストリーキングが横行し、フリーセックスも公然と認められるような学園の中で彼らがいつもいつも深刻であるはずはなく、前にも書いたように、金旺の夜は思いきり羽目をはずして遊んで気分転換をしたり、上手にリラックスして次のエネルギー源としていきます。又、パーティと議論が大好きな彼らは、しばしば集って夜中まで騒ぎますが、次の朝は早くからけろっとした顔で元気発刺と学校にやってきます。日本人からみると化物のような彼らのタフさにはいつも驚かされますが逆にアメリカ人からみると我々はいかに弱々しいらしく日本人の中では丈夫すぎるくらいの私でさえ最初のレッスンではもっと食べて体力をつけるようにと言われたほどです。今さら実行しても骨組が変わるわけではなく、横にばかり成長するだけでしたが、それでもピアノを弾くと少しは丸い豊かな音が出るような気がしたし、少々の無理なスケジュールもこなせたように思います。



オペラハウス 学生達によるオペラが度々上演され、オーケストラのコンサートもここである。

ブルームントンという所は、最初にも書いたように都会からは遠いため、世界的演奏家がわざわざ来て音楽会をするというのは大変なことで、素晴らしいオーケストラ演奏など聴くチャンスはあまりなかったのですが、インディアナの教授達が学校のホールで無料で度々演奏してくれたリサイタルの数々は、今でもはっ

きり思い出せるほど素適なものでした。第2次大戦後ヨーロッパから次々に素晴らしい音楽家達がアメリカに移住してきて、そのためこの大学でも何人かの魅力ある先生が教えています。インディアナにも国際的に活躍している有名な演奏家が数多くいて、私の場合アンサンブルが特に好きで出きるだけ勉強したいと思っていたのでメンバーを組んではいろいろな先生のレッスンを受け、そこでピアノの先生には習えないようなことを数多く教わることができました。各先生によってレッスンの方法とか、音楽も勿論異なるのは当然ですが、共通して言えることはどの先生も個性的な音楽家でレッスン中に必ず弾きながら教えるということです。その演奏を聴いて唯々感激することもあるれば、到底自分には無理とやる気をなくしてしまう時や、逆にファイトが猛然と沸いて楽しくなった時もあり、いずれにしても口での説明とは違ってよく理解が出きるし、レッスンに出かけるのが毎回待ち遠しいほどでした。それに加えて演奏家である

アメリカに留学して

先生達が練習を毎日欠かさないのは当然ですが、その上たくさんの生徒を教え、演奏旅行に出かけるという忙しさの中にあって、どれ一つとして決しておろそかにはしない音楽に対する情熱を目のあたりに見て胸を打たれる思いをしました。現在教える側に立ち、今さらながら先生達の偉大さを痛感している毎日です。